Paris 基準を用いた PBC - AIH オーバーラップ症候群の再評価

坂本　雅晴，　福永　篤志，　四本かおる，
久能志津香，　櫻井　邦俊，　岩下　英之，
平野　玄竜，　上田　秀一，　横山　圭二，
森原　大輔，　西澤　新也，　阿南　　章，
竹山　康章，　入江　　真，　岩田　　郁，
釈迦堂　敏，　早田　哲郎，　向坂彰太郎

福岡大学医学部消化器内科

要旨：PBC - AIH オーバーラップ症候群の診断において Paris 基準の感度，特異度が高いとされている．今回，PBC - AIH オーバーラップ症候群について Paris 基準を用いて再評価し，その有用性について検討した．平成 12 年（2000 年）から平成 21 年（2009 年）までの 10 年間に当科にて自己免疫性肝疾患と診断された患者の内，PBC - AIH オーバーラップ症候群と診断した 12 症例を対象とした．方法は，Paris 基準を用いて確診，基準外に分類しスコアの比較を行った．自己免疫性肝疾患と診断された全症例は，182 例であり，全自己免疫性肝疾患の内訳は，原発性胆汁性肝硬変が 80 例（44%）と最も多く，自己免疫性肝炎 74 例（41%），原発性硬化性胆管炎 16 例（9%）であった．その内 PBC - AIH オーバーラップ 症候群 12 例（6%）であった．Paris 基準において，基準外となった症例は 12 例中 6 例であったが，ALT 低値がその要因であった（$P<0.01$）．以上のことから，PBC - AIH オーバーラップ 症候群の診断において，Paris 基準を使用する際に，典型例以外は注意を払う必要があると考えられた．また，最終診断においては個々の臨床的特徴を踏まえて総合的に判断する必要がある．

キーワード：原発性胆汁性肝硬変，自己免疫性肝炎，原発性硬化性胆管炎，**PBC - AIH** オーバーラップ症候群